ICA Regional Co-operative Youth Seminar 2001

ICA 青年セミナー参加者座談会

2001/7/18　協同総研

6月25日～28日に東京、代々木のオリンピック国際青少年センターで行われた『ICAアジア太平洋地域協同組合青年セミナー2001』に労協・協同総研から参加した人たちに集まっていただき、セミナーのまとめの座談会を行いました。（構成：菊地謙）

出席者

三浦貴広（みうらたかひろ）29歳　'97年入職　センター事業団三多摩エリアマネージャー
山下太一（やましたたいち）28歳　'00年入職　センター事業団事業推進開発本部
堀越真紀子（ほりこしまきこ）28歳　'01年入職　協同総研事務局
高成田健（たかなりたたけし）27歳　'96年入職　センター事業団ならしの地域福祉事業所所長
奥原次郎（おくはらじろう）28歳　'95年入職　センター事業団東関東事業本部事務局次長
玄幡真美（げんばまみ）　'00年入職　日本労協連国際部

司会

菊地謙（きくちけん）33歳　'92年入職　協同総研事務局長

コメンテーター

岡安喜三郎（おかやすきさぶろう）　'00年入職　協同総研専務（元大学生協連）

【参加の動機を】

（菊地）　それでは、初めに皆さんがこのセミナーに参加しようと思った動機や全体的な感想から。

（三浦）　参加しようと思ったのは、日本の協同組合だけでなくてアジア太平洋という地域でどんな協同組合があるのか、普通に仕事しているだけではあまり他の国の人と接する機会がないというのが一つです。出てみて、話せないまでも聞けるのではないかと思っていたのですが、自分の英語力の低下していたのに愕然としました。

また、2週間くらい前に打ち合わせたときには、3日ないし2日くらいは丸々参加できる予定だったんですが、どんどん仕事が入ってきて、そっちもやらなきゃいけないというので、中途半端な感じで参加したところが悔やまれるところです。

発表に関しては、まあ、特に労協を「新しい協同組合」としてみんな位置付けて聞いていたように思います。打ち合わせなども少ない割には後悔しない程度には発表できたかなと。ただ、もう少し時間に余裕があって、夜のもう少しフランクなところ(笑)での交流に時間が割けたら、と思いました。そんなと

ころです。

（堀越） 参加の動機は、３月に日本でやった青年の協同フォーラム[1]に参加したんですが、協同組合のことをまだ良くわからない頃で、その中の結論で、各協同組合が結構みな縦割りで、横の繋がりがないということだったのですが、他の国ではどうなのか？また、国際交流をしたかったというのもあって、参加することにしました。

いろんな国の人たちがいて、すごく面白かったのと、言葉の面ではやっぱり十分に自分の言いたいことが言えなかったのが残念だったんですけど、若い人たちが一生懸命やっているなあというのが、すごく刺激というか自分も勉強しなければという思いになりました。

堀越さん

（山下） えーっと、結構時間もたってしまったので記憶が遠のいているんですが、とにかく最初は正直「行きたい」というのと、精神的な余裕がなくて面倒くさいなというのがありました。ここ３年は海外にも行っていなかったんで、自分の感性というのが国際的な場に出たことによって、ちょっとまた違った感性が呼び戻せた、というのでは意義があったかな、というのと、何よりも難しかったのは、労協の説明を日本語でもできないのに、外国人に聞かれてどう説明すればいいんだ、というところでした。やっぱりその歴史的な背景からして英語を使っている国というのが多かったので、何よりも語学力が必要だなと痛感しました。また、労協の勉強も忙しさにかまけて逃げていた部分もあったので、そういう部分も説明できるようにしないと、労協のことを突っ込んで聞かれたらどうしようか、というのもありました。

山下さん

（高成田） どこかの席で、岡安さんに声を掛けられて、ついつい「はい」と言ってしまったのが動機です。

労協に入って6年目で、ずっと内にこもっていたので、体が慣れていなかったというか頭が慣れていなかったというのか、今ひとつ入り込めなかったというのが正直な感想です。残念な思いもあるし、まあ、現状そんなもんかな、という…。もう少し外に向けた視野を持たなければ、と反省しています。

自分の認識として、アジアに協同組合がたくさんあるということがわかってなかったので、そういうのがあるんだな、というのと、どこでもやっぱりたぶん経過は違うんだろうけど、協同組合が滞っているというか閉塞感みたいなものを参加していた人たちにも感じました。だからこそ、こういうところで方向性が見えてくれば、と思いました。

（奥原） 感想としては、英語がやっぱりわかりませんでした。労協については、皆理解したんでしょうか？何か、ちょっと思ったのは、出資して自分たちで経営するという協同組合が、割と今の日本では一般的な働き方とは違う、全く対極にある働き方のように思うんですが、彼らについて言うとあまりそこはそう珍しい存在ではないという気がしたんですよ。その辺がやっぱちょっと面白い。ある

奥原さん

種特殊な感覚で俺らは協同組合に接している部分があって、より運動的なイメージで接しているのかな、と。ただ、向こうで言うと協同組合というのは、社会のアンチテーゼというよりは、より自然な形、選択肢のひとつとして捉えているんじゃないか。その意味ではその辺の議論はなかなかできなかった。

（玄幡） 私は実行委員会に何回か出て、準実行委員という感じだったんですか、私自身も本当に協同組合のことまだ勉強中だったということもあり、協同組合を知る機会にもなったわけですけども、何と言うか肌で感じたのは、労働者協同組合が非常に注目されているということです。幸いなことに私の分科会で労協の報告をしたのだけれども、その後フィリピンのリチャード君[2)]なんかも是非労働者協同組合を知らないので見てみたいと言って、菊地さんの案内で幾つかの所に行って、私自身も初めてで「ああいうものなんだなあ」と知るいい機会になりました。労協は非常に注目されているというのを肌で感じました。

三浦君とか高成田君が非常に忙しい中、レポート作って、いろんな協同組合が日本にもあるんだろうけども、日本労協連がそういう報告をできたということも、今後どのようにいいプレゼンテーションをしていくかという課題はあるのだけれど、布石となったのではないかと思っています。

（三浦） リチャードさんは急に見学に行くことになったんですか？

（玄幡） セミナーが終わってから次の日に。

（三浦） どこの現場に行ったんですか？

（菊地） センター事業団の保育園事業所、それから富士見デイサービスセンター、埼玉協同病院、最後に大宮の宅老所「いきいきはうす」というところを。

（岡安） ＩＣＡアジア太平洋地域事務所（ＲＯＡＰ）のベラミンさんも一緒に行きました。彼らは、なんで労協に興味をもったのかな？

（玄幡） 第３分科会に参加して…。

（岡安） リチャードがやっていることを我々から見ると、障害者の労協なんだよね、我々から見たら。でも、彼はあまりそう自覚していなかった。こちらからも彼らの活動を「労協だろう？」とは言っていないんだけど、彼が日本の労協の報告を聞いて興味を持った、というこの流れは非常に大切だと思う。

（玄幡） ＲＯＡＰのベラミンさん、彼も労協を知らないから是非、と言って見学に参加したんです。

（三浦） とにかく、労協をかなり「新しい協同組合」と注目していますね。

（堀越） 「ニュータイプ」って言ってましたね。

（三浦） そこまでの位置付けをされるものなんですか？

（菊地） 確かに長い協同組合の歴史の中では

プールの仕事を委託でもらってやってる、ということを生業としながら、まったく違った仕事にチャレンジしていった、「そんな協同組合ってあるのか？」（三浦）

（労協は）明らかに新しいタイプの協同組合ではあると思いますが…。

【セミナー全体を通じた感想は？】

（菊地） 今回のセミナーは、分科会や全体会の他にも交流会や見学ツアーなどさまざまなプログラムが用意されていましたが、労協の参加者は宿泊しない上に部分的な参加となってしまいました。もちろん言葉の問題はあるにしても、他の参加者と話をしたり交流することはできましたか？

（三浦） 泊まるというところでは、（自分の家が）府中でも泊まればよかったと。結構10時までとかやってるんですよね、毎日。その後の1時間とか、そこが結構重要なんじゃないか（笑）。お酒とかも入って、言葉はどうでもいいじゃないかみたいな、というところで、寝起きも一緒にして、そういったことからも、結構入っていけるのかな、と。

三浦さん

（岡安） 泊まった人間はおそらく12時過ぎまでみんなぐちゃぐちゃやっていたよ。

（山下） 泊まんないとダメだね（笑）。最初からそのつもりでやってなければ。

（三浦） スケジュールで動いちゃうと、インドのダンスやってる人[3]とかとコネクトする時間が…。（笑）

（山下） それは個人的な…。（笑）

（岡安） 山下君も個人的にスリランカの人とあった[4]じゃないの。

（山下） あれはあれで、今後の教訓という意味では、個人的にも教訓になりましたが、全体的にも教訓にもなるんじゃないでしょうか。

（三浦） スタッフの人は学生ボランティアなんですか？

（岡安） 学生ボランティアなの。それが集まっちゃったんだよ一杯。21名。英語サークルなんかあるから。この21名はほとんど生協の活動には関係ない人。

（一同） そうなんですか。

（玄幡） 全体会やその他を通じて、日本はこれだけいろいろなものをオファーしてボランティアもやっているのに、何かプレゼンテーションだけ見ると日本が一番送れている感じがして残念でしたね。

（岡安） ああ、プレゼンテーション。他の国がほとんど「パワーポイント」[5]を使って。あれ実は簡単なんだ。

（玄幡） 今度労協がプレゼンテーションやる時は是非。折角これだけいい内容があるのに。

（山下） シンガポールまで[6]いかなくても！

（玄幡） シンガポールまでいかなくても、インドもITの先進国だけど、せめて中国くらいまでいきたいよね。

（山下） 「何を使う」というより「わかりやすさ」ですよね。

（菊地） プレゼンテーションの問題は、何というかコミュニケーションの仕方がやっぱり、いろんな人がいる国というのは、わかりやすく打ち出さないとわからない。日本人はあまりそうしなくてもわかってしまう、という問題があるのかな、と。

（岡安） 実はわかってないんだよ。

（菊地） できれば、労協の会議でも「パワーポイント」を使ってプレゼンテーションをするくらいのことを、玄幡さんにお願いした

い。（笑）
（玄幡） えーっ。

【協同組合と青年について】

（菊地） ところで、何で、ＩＣＡの会長が来られる[7]ことになったんですか？（ＩＣＡ）ケベック大会とかでそういう方針が出て、ということですか？
（岡安） うん、本人も今度退職だから、ということもあるんじゃない？特に協同組合全体として青年を重視するということを掲げてきているから、それを象徴的にするためにも、地域的なセミナーだけど「多分、会長参加するんじゃないか？」とちょっと頼んでみたら、来ることになった。
（菊地） 今後もＩＣＡとしては青年関係の取り組みを重視していこうということなんですか？
（岡安） そうそう。だからＩＣＡ全体としては、この後の１０月のソウルの大会の前に青年セミナーというのを開こうということで準備している。１日だけだけど。これからも総会とかあるたびに、青年の集まりとか青年の活動どうするかとか、そういうのをやっていくんじゃなかな。そう提案しつづけてきたんだけど。
（菊地） その、ＩＣＡがあえて青年のことをやろうというのは、青年の参加が少ないという問題意識があるということなんですか？
（岡安） そういう問題意識があるということ。逆にヨーロッパ中心に雇用問題とかこの間やってるじゃない。特にＥＵ関係でね。そ

岡安さん

の中で、青年の就労という問題については特別に重視する必要がある、そのことを抜きにして国の将来はないのだから、という組み立てで、ＥＵ自身が、特に同じ就労といったときに、青年を重視しようという基本政策を加盟国に提起しているんだよね。そういうことが一方にあって、ＩＣＡも歴史的にも青年フォーラムをやってきている。地域的にもアジアはしつこくやっている[8]。

ということもあって、ケベックの大会の時に”青年委員会”を作ろうという提案を、その場でロドリゲス会長が言ったもんだから、「方向はいいけど”青年委員会”は時期尚早」という意見を私の方から出したんだ。まだまだ積み上げが必要だ、と。という流れがあるから、今後も当然青年を重視していくことになる[9]。
（菊地） ええと、セミナーに参加してみて、結局最後まで参加者がどういう構成か、というのがわからなかったのですが、来ていた人たちは、半分くらいは大学生協、半分くらいが他のさまざまな協同組合でしたよね。
（岡安） まさにさまざま。クレジット、ワーカーズもいれば、農協も。
（菊地） 協同組合に参加している若者の実数という点では？
（岡安） それは、学生が多い。学生は組合員

与えられたものをやるということだけではないので、自分にはすごく合ってるというか、やりたいと思う仕事ができると思います。（堀越）

パレスチナの人なんか、「働けよ！」って言うだろうな。「引きこもってる余裕ねえよ」「生きるか死ぬかだぞ」みたいな。（山下）

として広範に組織されている。就労というのは、かなり限られた分野。

（玄幡） 確かに、大学生協というのは、協同組合を知る最初のきっかけになることが多くて、非常に重要だと思うんだけど、その先が消費生協にしか向かない、というのがもう一つやっぱり…。

（岡安） うん。今の日本の大学生協は、生協法でやってる協同組合だけれども、まさに大学の中にある学生教職員の協同組合という形に作り変えをしないと、蘇生できないのではないか、という問題意識を、私の方からしているところ。要するに物の販売とかでなく、その中で学生が現実に動く形。今は動くといったら学生委員という形しかないけど、実際には動けない。

そういうことだけではなくて、例えば、昨日大学生協連の専務理事と話をしたのは、ある大学では、生協の学生委員になったら単位を４単位くれる、と。

（一同） へぇー。

（岡安） そこの学長というのは、元信州大学の生協の理事長だった人。でも、ただ学生委員というだけではまずい面もあるので、できれば、例えば清掃などの仕事をやる。もちろん、すべての清掃をスチューデント・ワーカーズコープでやるのは無理があるので、折角大学の中なのだから、半分を学生から採用する、といった仕掛けにして、お年寄りと若者が一緒に仕事をする。そんなビジョンをはっきりさせて、学生の方はワーカーズコープを作らせる、といった形でやることが可能になってくるかもしれない。

そういう風にして大学生協も動いていかなければ。生協法の中の協同組合なんだけど、意識としては、青年の横のつながりをつくろうだとか、学生時代に生協の案内だけでなく農協や労協などいろんな協同組合が活動していることを紹介し、日本の協同組合全体の中に位置付けようという仕掛けに切り替えつつある。だからこういうセミナーをやろうということについての抵抗感はないんだよ（笑）。

（玄幡） このセミナーのメーリングリストで大学生協の矢部君が「日本の協同組合についてようやく少しずつわかりかけてきた」と書いていて、それは収穫だったのではないかな。労協からも大学生協にもっと働きかけていって、参加してもらう、という働きかけが必要ですね。

（菊地） 労協に限らず、今回のセミナーの参加者は、いろんな協同組合から来ている人がいたじゃないですか。いきなり「私はクレジットの協同組合で働いています」とか言われても、何やってるのかピンとこないっていう問題があるんだと思うんですよね。あまり何言っていいんだか、「ああ、そうですか」っていうくらいで（笑）。具体的なイメージが湧かない、日本に信用組合とかありますけど、同じイメージでいいのか？

（岡安） 日本よりは幅広い。仕事おこしの融資をしたり。

（菊地） でしょうね。そういう意味では勉強になる、というか、それこそ法制度が全然違うから活動の幅が全然違っていて、そこのところをわからないで話していても…。

（三浦） 今回のセミナーでは、カントリーレ

ポート以外に、そこの国自体の協同組合の説明みたいなものは、なかったんですか？「クレジットの協同組合とは？」とかの資料があれば。多少でも予備知識がないと、言葉もままらないのに…。

（菊地） 逆にいうと、日本は何の資料も出さなかったから、理解されたかどうか？せめて、英文の紹介ペーパーの一枚でも出さないと。

（岡安） いや、労協から参加した人間が、言葉通じなかったかもしれないけど、皆、乗り出して元気にやってるから、印象に残るんだよ。ワーカーズコープと言ってる人間は、どうも元気だ、と。何かあるに違いない、と印象を与えたと思うよ。

（三浦） 全体会の最終日にはどういう意見が出たんですか？

（山下） フィリピンの人から「今回セミナーをやって意義があったのか」ということを総括すべきだ、という話が出たんですけど、マレーシアの人から、これからスタートなんだから続けていくことが大事だ、と。来年はマレーシアで、ということになってました。

（玄幡） でもそれは、ペンディングになって、やはり準備に時間をかけて、ということになってましたね。

（山下） あと、最後の全体会で出ていたのは、もう少し純粋に交流する場を増やして欲しいということでしたね。もう少し親密にならないと、眠ってるものが出てこない。普通の人間関係でもそうだと思いますけどね。

（菊地） プログラム的には結構盛りだくさんでしたね。

玄幡さん

（岡安） やっぱり、ちょっと時間が足りなかったんじゃない。みんなの感想としては。

【分科会について】

（菊地） 労協としての参加の中心になったのは、３日目の第３分科会で、三浦さんと高成田さんが報告をしたわけですが、そこで労協が非常に注目された、ということだったので、そこについての報告を。

（三浦） 発表自体は作ってきた英文を読みながら写真をＯＨＰで写すということだったんですが、内容が、仕事をおこす、例えばプール管理とかいう既存の事業から、福祉とか地域に根ざしたコミュニティビジネスに転換した、というのがインパクトを与えたんじゃないでしょうかね。

多分参加している人たちは、それぞれが所属している協同組合の枠の中で活動している、というのがほとんどだと思うんです。例えば生協なら安心安全なものを共同購入する、といったことで活動していると思うんですが、今回の高成田君がした発表は、プールの仕事を委託でもらってやってる、ということを生業としながら、まったく違った仕事にチャレンジしていった、「そんな協同組合っ

どうしても今の労協は「やらねばならぬ」的なところがあるんだけども、そうしなくてもできることがあるんじゃないか。（奥原）

てあるのか？」というところが、労協が「新しいタイプの協同組合」と言われたところじゃないでしょうか？

従来の協同組合という枠に収まらない活動をしているというように皆受け止めたんだと思います。当然、発表した内容は、労協がやってる活動の中では１事例に過ぎなくて、それが標準化された仕事おこしの事例にはなっていないのですが。

発表した時は特別何か質問などはなかったので、あまりインパクトがなかったのか、と思ったのですが、その後のグループディスカッションでは、ワーカーズコープが話題になった。

（高成田） ひとつは自分の英語の問題もあるんですけど、もうひとつは、発表内容がアジアの人からは理解できない内容だったのではないか。１人目の発表の後と、自分の発表の後のリアクションをみると、皆どう突っ込んでいいのかもわかからないんじゃないか、と。

日本は、ここまで発展した先進国なのに企業を選ばず、あえて協同組合でやるというところの、理解と言うかベースが共有できてないと難しいなと思います。それに比べて日本の生協の若い人が労協のことを興味深く話していたのは、印象的でした。日本においては、面白い取り組みをやっているんだな、と感じました。

高成田さん

（菊地） 他の人は、結構、発表を聞いて参加者の労協についての関心が高まったと評価しているけど？

（高成田） そこまでは感じませんでした（笑）。

（山下） 三浦君の生い立ちみたいなところから始まって、なかなかよかった。労協があんなこともこんなこともやってる、というよりも、現実に一つの形としてこういうことをやってるとを示せたと思う。

（岡安） ワーカーズコープにとても興味をもったんじゃないかな。

（菊地） グループディスカッションではどんな意見が出たんですか？

（三浦） 僕自身が出たところでは、新しい協同組合を創造するために何が必要か、といった話し合いで、もっと協同組合という場を学んで知ってもらうために、可能かどうかわからないけど、義務教育の段階で授業の中に入れるとかいうことができないのか、というのがひとつ。それから、協同組合同士がもっと知り合う場を作る必要がある、というのもありました。

（堀越） どのように若者に働きかけるか、という点がテーマでした。イベントやメディアの利用、そしてやはり協同組合間の協力が必要、という内容でした。高齢協のことも結構話題になってましたね。

（三浦） 子育て支援に皆は興味を持ってましたね。子育てを通じてよりまた人間的に成熟していく、そしてその人を支援していく、協同組合だからこそできるそういうことにトライしていく、ということ。

あと、若者に魅力のある協同組合とはどういうものか？という話し合いではプールの現場から武蔵野市のＩＴ講座に関わった組合員の例を話しました。彼自身が持っている能力や興味をうまくたまたま結びつけることができた。彼自身がの可能性が体現できるような

場を提供していくことができたら、と。

（高成田） 労協についてそんなに関心が高かったり、質問が飛び出したわけではなく、もう少し大雑把に、「どうやったら協同組合に若い人を引きつけられるのか？」とか、そういった話が多かったですね。3カ国くらいの人がいたと思うんですけど…。ベースが理解できていないからなのか、私の英語の問題かわかりませんが、そんなに関心があるような議論には、私のグループではなりませんでした。

（三浦） 確かに労協が発表し終わった直後は、戸惑いもありましたね。「これは何の協同組合なんだろう？」という。

（高成田） それと、もうちょっと文書をね。

（岡安） だけど、発表でしゃべっている間は、皆結構真剣に聞いていた。

（高成田） だから、もうちょっと日本の高齢化社会とか、就業状況とか全般的なことを説明しておいた方が良かったかなあと。やっぱりあの説明では足りなかったかな。日本の人はわかってるから、あれだけで十分通じたのかな、と思うんですよ。

（堀越） グループ討論で聞かれましたよ。日本の学校出てからの就労の仕組みとか…。

（高成田） そういうところがもっと深くやれるとね。

（山下） 教育システムとか。

（高成田） だって皆、大学行ってるわけじゃない。それでいてなんで働かない選択をするのか、フリーターや引きこもりといった問題は捉えづらったのかな？と。

（山下） パレスチナの人なんか、「働けよ！」って言うだろうな。「引きこもってる余裕ねえよ」「生きるか死ぬかだぞ」みたいな。

（高成田） 「自分たちでお金出して協同組合でやる」って、日本では頑張ってると言うか変わっていると言うか、それが他の国の人には、「それあたりまえじゃん」みたいな。そこが、どこがそんなに、と思えたんですよ。

（玄幡） それはあの小さな分科会の説明では、ちょっと無理でしょう。だから、分科会を小さく分けてやったんだけど。ただ、やっぱりリチャードみたいに協同組合に関わってきた人なんかは、やっぱり労協を知りたいって。それで、後で労協の現場を見学したんだけど、「ああ、こういうのが労協なのか」と。だからあの話とあのプレゼンテーションの中では、もう一つ具体的なイメージは湧かないんだよね。

（高成田） かなり「人」に焦点を当てた報告にしたもんだから…。

（山下） 次回の話になるかもしれないけど、英語の事業案内を皆に配れれば。

（岡安） でも、それは、「この協同組合はこういう事業だ、この協同組合はこういう事業だ」ということになるから、意外と難しいんだよ。

（高成田） あの時間、そもそも1日2日とい

考えてみたらフィリピンなんて、日本よりもっと大変なのに生き生きしてしてるよね。私たちの方が色々引きずってるよね。（玄幡）

もったいないな。そんなに悩んでやることじゃ無いんじゃないかな？（高成田）

うことでは難しいのかな、と。

（玄幡） そのことはあんまり悲観しなくてもいいんじゃない？

（奥原） 特に日本の生協や農協ではなく、労協についてはそう思いましたね。戦後日本が歩んできた道も含めてどういう社会状況があって、どういう中に青年が置かれていて、というところからできればよかったのだけど。でも、説明しても理解できたのかな？という思いもあって。

（岡安） 皆、言ってることはわかったはずだよ。ただ、中身をイメージするのは厳しかったかもしれない。

（玄幡） バックグラウンドを理解することは難しいですよ。それは、日本だけのことではない。アジアの人にとっては協同組合が一つの選択肢になっているのかもしれないけど、日本ではそうはなっていないんだけど、そこを変えていく、というのはこれからの課題だよね。アジアの人にわかってもらう前に、日本で私たちの周りにいる青年にとって、協同組合が仕事を探す時の一つの選択肢になっているかというと、全然なっていなくて、その辺のところが。

（菊地） アジアでわかってもらう方が楽だったりして。（笑）

【このセミナーでつかんだもの】

（岡安） このセミナーでこういうものをつかんだ、というのがあったら、出してもらったらいいんじゃないか？

（三浦） 協同組合が行き当たっている限界・難しさというのが、従来やってたことの範囲からどうやって飛び越えて発展するかという点で、相当どの協同組合も閉塞感を感じてるんじゃないかと思うんですよ。で、この間僕自身が思ってることは、例えば農業分野なら農業分野だけの協同・共生にとどまらないで、農業と今ある社会のニーズをどう絡めて発展させていくのか、そういう意味での挑戦なら労協はまだやりやすいじゃないか。新しい協同組合と言われる反面、まだまだ未熟な協同組合だと思ってますし、そういう意味ではどんどん挑戦していくということの必要性を、セミナーに出てより強く感じました。

（堀越） まだまだ協同組合のことを勉強しなければならないんですが、自分でやっていかないといけない、与えられたものをやるということだけではないので、自分にはすごく合ってるというか、やりたいと思う仕事ができると思います。今回参加して思ったのは、英語をやらなきゃなあというのは、もちろんなんですが、全般的にまあ、いろんな面でやる気はでたかな、とは思います。労協で何をやってるかというのもまだわかってないので、何にでもちょっといろいろ興味とやる気が出てきました。

（山下） 協同組合とは、労協とは、ということを考えることは大事だと思うんですけ

若者が実際持ってる本当の力がどう出せる協同組合にできるか、それが今後の課題だね。（岡安）

ど、もっと根本的本質的な問題として、「協同」という言葉の捉え方として、要するに不便であれば人間は必然的に協同すると思うんですよ。だけど、便利さとか合理性が協同を奪っていったんだと思うんですよね。日本とか世界とかだけじゃなく人間の社会構造全般として、その視点で捕らえたとき、どうなのかと。もともとが自然の生態系の中で、不便さと戦いながら協同していたものが、今は協同というものそのものが奪われた環境の中で、あえて意識して協同している。それは何故かというと人間は協力していかなければ生きていけないから。そういう意味では労協の可能性というものが見えた気がしましたね。

（高成田） 5年もやると課題ややらなきゃいけないことに向かって視野がどんどん狭くなっている中で、やっぱりアンテナを高くいくつも持たなければならないと実感して、これをいいきっかけにしたいな、と思いました。

（奥原） 協同組合ということでこれだけの国の人が集まれるというのは、協同組合ならではじゃないかという気がしたんですよ。もうひとつは、皆すごい若いくせに英語がペラペラ、また生き生きしている。聞いてると皆、本当に確信を持ってやってるのかな？と思う部分もあるんですけど、

ただ、自信を持って発言している。そういうところが自分に足りないところで、また、違った視点が見えてきたように思います。彼らも疑問は持ってるのだろうけど、素直に協同組合という形で「何かができるんじゃないか」と考えている。どうしても今の労協は「やらねばならぬ」的なところがあるんだけども、そうしなくてもできることがあるんじゃないか、と感じました。生き生きしてたなあ、日本の青年にはないすごいシンプルな関わり方でいいな、と思いました。あとは英語ができりゃな、と。

（玄幡） 考えてみたらフィリピンなんて、日本よりもっと大変なのに生き生きしてしてるよね。私たちの方が色々引きずってるよね。

（高成田） もったいないな。そんなに悩んでやることじゃ無いんじゃないかな？

（山下） モチベーションがね。(笑)

（岡安） 若者は、まだ主張するにも語彙も足らないし、どういう風に言ったらいいのかもわからない人が一杯いるわけじゃない。その点では、他の労協の若手なんかを見ながら、そういう人間も一緒に元気になるとはどういうことなのか、是非考えて欲しいと思うよね。自らの課題として。自分が元気になるだけでなく他の若い者が一杯いるんだから。

（山下） 心に余裕がないとね。自分のことで精一杯というのが正直なところ。

（高成田） 妙に外見にこだわるんですよね。日本全体の若者の共通課題として、自己表現が下手。引きこもり、不登校と一緒でね。コミュニケーション下手、というのがありますすよね。あまり余計なことは考えず、とにか

くやってみてから考える方がシンプルですね。

（奥原） 事業計画のヒアリングとかやらない方がいいんじゃない？（笑）

（岡安） 発表するから論争になる場面がある。それが元気になる要素。それを全体でどう高めることができるか。若者が実際持ってる本当の力がどう出せる協同組合にできるか、それが今後の課題だね。

（菊地） ええ、盛り上がってきたところですが、時間となりましたので、この辺で終わりにさせていただきます。

短い時間の経験ではありましたが、自分たちのやっていることを、日本の中で、そして世界の中でもう一度捉えなおす良い機会になったのではないかと思います。

今日はどうもありがとうございました。

1) 第1回「青年協同 フォーラム」（2001年3月21日）大学生協、ＪＡ青年協、生協、労協などの青年ら13団体70人が参加。
2) フィリピンからの参加者、リチャード・アルセーニョさん。「協同組合主義を通じて自立した生活を！」を掲げる障害者によって組織され運営されるフィリピンで最初の協同組合、Bigay Buhay Multipurpose Cooperative (BBMC)ジェネラル・マネージャー。労協と同じく第3分科会で報告した。
3) セミナー2日目の夜に『文化交流会』があり、インド代表の女性のダンスに、多くの男性参加者の目が釘付けに(？)。ただこの日、三浦さんは昼で帰ってしまい、このダンスを目にすることはできなかった。(菊地)
4) 山下さんが、スリランカの参加者に、来日にあたっての身元引受人を頼まれてしまった事件。結局、事務局を通して断った。(菊地)
5) Microsoft PowerPoint(R) Microsoft社のプレゼンテーションソフト。パソコン上でのプレゼンテーションの多彩な機能があり、プレゼンテーション・ソフトの事実上の標準となっている。
6) 各国の報告がパワーポイントを使ってプレゼンテーションされる中、シンガポールは生協の紹介ビデオまでパソコン上で流し、プレゼン慣れしているところを見せた。（菊地）
7) Dr. Roberto Rodrigues（ロベルト・ロドリゲス）ＩＣＡ会長。ブラジル出身。92年から95年までＩＣＡ農業委員会委員長。97年より現職。
8) 詳しくは、岡安喜三郎「ICAアジア太平洋地域協同組合青年セミナー 2001」（本誌今号P25～P28）を参照。
9) 資料『2001年8月12日 国際青年デーにあたってのＩＣＡからのメッセージ』（同P21）